

謎の御伽物語の五大

あるいは嘘だらけの絵本とその黒い背後思想

童話研究家
児零尾久十



五大御伽話の謎あるいは嘘だらけの絵本とその黒い背後思想
童話研究家十久尾零児著 イラストレーション 櫻井一虎 見書房

五大御伽話の謎 あるいは嘘だらけの絵本とその黒い背後思想

昭和45年11月20日初版発行

著 者 十久尾零児

発行者 虎見恵美子

発行所 虎 見 書 房

東京都新宿区戸塚町 3 の934

郵便番号160 電話368・1065

印刷所 光 明 社

製本所 越後堂製本

定 価 580円

●落丁・乱丁本はお取り替えます

(分)0—0—95(製)0030(出)5280

©1970 Reiji Jukubi printed in Japan

まえがき

「まえがき」というものが、一体どういうものであるのか、ふと理解に苦しむことがある。内容のいわば予告篇といったものなのか、この本を出す意義を縷々説明するためのものなのか、あるいは内容のダイジェストの意味あいをもつものなのか……。そして（きわめて初歩的ハシモンなのだが）「まえがき」というものは、さあこれからいよいよ書き始めますぞ、というときに書くべきものなのか、それとも、ようやく脱稿した、それでは、といっておもむろに書くべきものなのか……

結局私は、いろいろ思い悩んだ末、（原稿が書き上ってしまったせいもあるのだ）「まえがき」を「内容の大凡の紹介」にしようとした。

五大御伽話というのがある。とりたてて「五大」としなければならぬ根拠はないのだが、その普及度・知名度から、いつの間にか「御伽話の代表格」とされ、「五大」として定着してしまつたらしい。それで通ずるようになってゐる。『かちかち山』『桃太郎』『花さか爺』『さるかに合戦』『舌きり雀』の五話である。誰でも知っている話ばかりである。

その「誰でも知っている話」を今更とりあげて一冊の本にして出そうというのは、人によっては「けしからん」とお咎めをうけよう。どう考えても大人の読むものではない、とお叱りもうけよう。それは充分承知している。勿論私としても読まれない本を書く気はないし、それは疲労を貯蓄する愚でしかないだろう。

では、なぜ書くのか？ 書いたのか？

七面倒な勿体ぶりはやめて、率直に言えば、「誰でも知っている」筈の御伽話が、実は「誰もが知らない」謎に満ち満ちていることに私が気づいたからである。五大御伽話自体にも勿論、それらの元となる昔話にまで歴史をさかのぼってゆくと、思いもかけない疑問と謎の闇に出喰わされて驚くのである。たとえば、川から流れて桃太郎はやってきたが、それは桃太郎だけなのか……？ ここ掘れわんわんのぼちはどうして白い犬でなければならぬのか……？ 浦島太郎の玉手箱から出た白い煙は何を意味するのか……？ 御伽話のお爺さんはなぜ一様に「山へ柴刈りに」行くのか……？ 等々……

右はほんの一部にすぎないが、こうした疑問をひとつひとつ解明してゆくと、ついには驚くべき事実到我々は行き当り、瞠目させられるのである。同時に、その周辺に暗く低くうごめいた日本人の数限りない欲望と策略と、そして「権力」の狡猾なプロパガンダが……（たとえば、桃太郎の絵本にあるさまざまな歪曲が、改作が……）

あわせて、童話となった段階における問題点も、さまざまな角度から追及し、告発してみた。それが童話である限り、幼児の精神形成に多大な悪影響を及ぼすに違いないと思うからである。つまりは私たちがかつて知らず知らずに教え込まれた不幸を現代の幼児たちに味わわせてはならないと思うのである。

予告篇的に本書のテーマを書けば、

☆五大御伽話の謎を解明し

☆日本の貴重な文化財を破壊しようとする行為を告発

☆同時に、絵本・童話のあり方をもう一度考え直してみる

ということになろうか。

なお、第一のテーマを追及するにあたり、柳田國男氏（「先生」と書くべきであろうが、私はまったく個人的理由で「先生」なる言葉を軽侮しているのでご容赦願いたい。）の『桃太郎の誕生』（角川文庫）に大変助けられたことをここにしるしておく。この種の研究ではまずこの名著の右に出るものはないであろう。併読されれば幸甚である。

また、私自身の説に疑問を感じられたならば、遠慮なく御指摘下されたいと思う。

昭和四十五年秋

十久尾 零児

五大御伽話の謎・あるいは噂だらけの絵本とその黒い背後思想■目次

第一章 かちかち山

- 童話〈かちかち山〉 一一
 昔話〈かちかち山〉 一四
 『かちかち山』はつぎはぎの物語である 二五
 つぎはぎの目的は何か 三〇
 誰が「仇討奨励話」にしたのか 三七

第二章 桃太郎

- 童話〈桃太郎〉 四七
 昔話〈桃太郎〉 五〇
 『桃太郎』と『瓜子姫』との近親関係 五六

『桃太郎』と『かちかち山』は従兄弟である 六三

『桃太郎』は侵略者であった 六七

鬼——その存在の謎 八〇

第三章 花さか爺さん

童話〈花さか爺さん〉 九一

昔話〈花さか爺さん〉 九三

『花さか爺さん』と『桃太郎』は同じ話だった 一〇六

もうひとつの“主人公”の登場 一〇九

『花さか爺さん』のぼちの本名は？ 一一四

第四章 さるかに合戦

童話へさるかに合戦 一二一

昔話へさるかに合戦へ

一二五

さるかに合戦の争いの元は柿か？

一三三

さるかに合戦は全てに通じていた……

一三七

さるの尻はなぜ赤いのか

一四二

第五章 舌きり雀

童話へ舌きり雀へ

一五一

昔話へ舌きり雀へ

一五四

『舌きり雀』と『腰おれ雀』は別物である

一五九

『舌きり雀』と『桃太郎』の共通点

一六三

五大御伽話のパターンと思想を探る

一六八

『かちかち山』再登場

一七六

『浦島太郎』と『鼻たれ小僧』

一八〇

なぜお爺さんは柴刈りに行くのか

一八九

玉手箱の“煙”は何であつたか……

一九五

現代童話への疑念と告発

桃太郎の死滅	二〇七
『かちかち山』 仇討論について	二二二
食人について	二二〇
『かちかち山』 残酷論について	二三二
童話『花咲爺さん』の犬の行動について	二三九
創作童話の本質	二四四
ダイジェストを子供に与えるな	二五一
絵本の絵は説明図ではない	二五八

第一章 童話と昔話との相違 かちかち山は単独の物語なのか 誰が仇討話にしたか 他

かちかち山



童話 〈かちかち山〉

（これは、現在〈童話〉として巷間に氾濫している『かちかち山』の絵本の内では、もっとも普遍的・平均的なものと言つてさしつかえなからう。勿論、陳腐な、他愛のないものであることは言うまでもないが、これも順序、とりあえず読み通して頂きたい。誰でもよく知っている話なので、子供の時分の記憶とひき較べられれば、あるいは郷愁にひたられることになるかもしれない）。

——むかしむかし、ある所に、お爺さんとお婆さんがいました。裏山の悪い狸に、畑の大根やいもを盗まれるので、お爺さんは口惜しくてしかたありません。

「ようし、わなをしかけて生捕りにしてやろう。」

間もなく、お爺さんは、わなにかかった狸をつかまえました。お爺さんは狸を縛って、家に帰ると、天井の太い柱につるしました。

「お婆さんや、狸汁にするから狸を逃がしてはいけないよ。」といって、また畑へかけて行きました。

「お婆さんが、とんとんと麦つきを始めると、狸は、つるされたままで、お婆さん疲れるでしょう。お手伝いしますから縄をといて下さい。」

「とんでもない。といたらお前は逃げてしまふ。」

「大丈夫。終ったら、また縛られますよ。」

そこでお婆さんは狸の縄をといてやりました。すると狸は、麦をつくふりをして、いきなりきねで、お婆さんにおそいかかりました。

お婆さんが尻もちをついたすきに、狸は裏山へ逃げてしまいました。

間もなく、畑から帰ったお爺さんはびっくり。けがをしたお婆さんの看病をしていると、兎がやって来ました。これまでのわけを聞いた兎は大変怒りました。

「よおし、僕がこらしめてやる。」

兎は、狸の家へいって薪たきぎとりにさそいました。そして帰り道、兎は火打石をとり出して打ちました。

「兎さん、かちかちいうのは何の音だろう？」

「この山は、きつと、かちかち山っていうんだよ。」

兎は、狸の薪に火を付けました。

「兎さん、ばうばういうのは何の音？」

「この山は、きつと、ぼうぼう山っていうんだよ。」

薪はどんどん燃えて、狸の背中に燃えひろがりました。

「うわあ。熱い熱い。背中が火事だ。たすけてえ。」

狸の背中は大火傷、一日中寝床の中で苦しみました。

そして、やっと背中の中火傷もなおった頃、また、兎がさそいに来ました。

「狸くん、狸くん。舟を作って、海へ魚釣りに行こうよ。僕は木の舟、君は泥の舟だよ。」

「よし、作ろう。泥の舟なら早く出来る。」

舟が出来上ると、早速、海へ浮かべて、こぎだしました。ところが、狸の舟は泥でできているので、どんどん溶けて沈んでゆきます。

「兎さん助けてくれー！ 早く。」

「よし、もう畑のものを盗んだり、お婆さんをひどいめにあわせたりしないと約束するか。」

「ごめんなさい。もう二度としません。」

狸が泣いて謝るので、兎はかいを突出して、「これに捉まって、僕の舟に乗り移りなれ。」

兎と狸は岸に戻ると、早速お爺さんとお婆さんの家に行きました。狸は二人の前に両手をついて、謝りました。

「よしよし、悪い狸が、いい狸になったのか、それはよかった。」

お爺さんも、お婆さんも、にこにこ笑って許してあげました。

おしまい

昔話へちかち山

（これからお読み頂く物語は、岩手県に今でも残るほぼ『かちかち山』の原型と思われる昔話であるが、妙なことに、ストーリー自体は確かに『かちかち山』であるにもかかわらず、さていざタイトルを付してみようという段になると、少々躊躇せざるを得なくなる。それは読んでいただければわかって貰えると思う。奇抜なストーリーなので、〈童話〉ほどの退屈は与えない筈である。）

——昔々、爺さまと婆さまがあつたそう。爺さまが畑へ行って、畑を打っている
と、悪い狸が出て来て、木の切り株に腰を掛けて、